

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370262

研究課題名(和文) 『レディーズ・ホーム・ジャーナル』の小説作品における政治力

研究課題名(英文) A Study of Political Power in the Ladies' Home Journal

研究代表者

秋田 淳子 (AKITA, JUNKO)

岩手大学・人文社会科学部・講師

研究者番号：10251688

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：1883年12月に創刊されたthe Ladies's Home Journalは、政治的な言説を扱わない女性雑誌として知られている。しかし、第一次世界大戦期には、読者の愛国心を鼓舞し、当時の政局の趨勢に加担させる大きな影響力をもった。戦時下において戦争を主題にしない小説作品や、創刊号から継続されて掲載された料理のレシピを分析することで、女性文化における日常生活における「政治力」の可能性を指摘した。

研究成果の概要(英文)：After entering WWI, the content of the Ladies' Home Journal (LHJ) changed drastically. LHJ was famous for refraining from directly referring to political issues. However, LHJ took a leading role in encouraging its readers to be loyal Americans by insisting on the validity of the reasons for entering the war. Emphasizing the importance of the spirit of patriotism and thrifty living, the entire issued inspired readers to support their nation during the war and other critical phases. LHJ mainly carried two types of literary works. One type is the so-called "propaganda novel." The other type featured romantic plots. I have focused on the role of serial novels with subjects that appear to be unrelated to WWI. I contend that female writers successfully protested against U. S. political measures to face the wartime conditions. Such novels show that some female writers resisted submitting their narratives to the national intention to manipulate LHJ during WWI.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学 アメリカ文化 女性文化

1. 研究開始当初の背景

アメリカ文学研究の領域で小説を考察対象とする場合、一般的に、著書の形態で出版された作品を扱う。19世紀初頭から、現在の著書の形態をとる作品の多くは、雑誌への掲載という初出形態をとるものが多かった。特に、19世紀における作品の雑誌形態は、職業作家として無名の新人女性作家たちを輩出する媒体として機能していた。1970年代以降に、文学史からも消されてきた作家を出版当時の文脈の中で再評価する動きが活発化する。この動向により、1850年以降に出版された女性作家作品が復刻され、現在では一定の評価はすでになされている。しかし、こうした作家作品の初出媒体が雑誌であったことにはあまり目がむけられてはいない。本研究では、雑誌という媒体を研究対象とすることで、著書形態が主流となっているアメリカ文学研究に新たな解釈をもたらし得るだろうと確信した。

作品発表の初出の場を考察の視野に入れることで、第一に著書という形態でなされている文学作品の読みなおし、第二に、再評価がなされていない作家や作品の掘り起こしという2点において、従来なされてこなかったアメリカ文学研究が可能となろう。さらに、雑誌が作家と読者を育成し、アメリカ文学の受容と供給の場の成立に関わったことを提示することにより、雑誌媒体自体を再評価することにもなると推測した。

2. 研究の目的

(1) アメリカ大衆女性雑誌 *The Ladies' Home Journal* (以下、*LHJ*と記す)における小説作品を、広告、イラストやコラムなどの多層な言説との関係性の中で分析する。余暇や娯楽のために利用されたと思われるがちな *LHJ* が、19世紀後半のアメリカ社会において、100万人以上の定期読者を中心に、女性文化を形成する役割を果たしていたことを示す。さらに、女性たちに読書という共有の経験をさせることで、アメリカ国民としての連帯感を強固にし、国民意識を高揚させていた点を明示する。*LHJ* は、現実とは乖離した「夢」や「理想」像を示す一方、政治的な意向を受けたメッセージを発することをとおして、愛国心をもった「理想的なアメリカ人」を育成するために、女性たちの意識を煽ることに成功していたことを明らかにする。

(2) *LHJ* の発する政治的なメッセージを、小説作品を中心に分析した。一般的に、同誌の小説作品は恋愛や結婚を主題とするものが多く、他の言説も料理や育児を中心とする家事に関するものやファッションなどの内容を扱う。また、大統領を取り上げるにしても、彼の家族や私的な趣味であったりすると、第一次世界大戦期を除いては、政治的な主題とは直接結びつかないものが多い。しかし、同誌はさまざまな工夫で読者の愛国心を鼓舞し、女性読者を「理想的な」国民とするため

にメッセージを発し続けた。同誌が扱う「家庭」という狭い領域の改善策や一個人としての充実した人生への助言は、常にアメリカ国家に属する国民にたいする提案であった。100万人を越える定期購読者数からも推測されるように、同誌の女性読者にたいする影響力は多大なものがある。政治的なメッセージの分析は、同誌の提唱する「理想的」な国民として育成するために女性読者たちの意識を操作していく過程の一端を示すことになる。

本研究は、*LHJ* の小説作品を中心とする多様な言説が、単なる「娯楽」の手段、また、毎月消費される「商品」であったと考えられてきた一般的な傾向に異議を唱えることを目的とする。同誌が、当時の多くの女性たちの思想や価値観に多大な影響を及ぼし、家庭という領域を越えた、社会や国家という外部領域へと意識を広げる媒体であったことを「政治力」という観点から強調していくことを目指した。

本研究の目的となる「政治力」とは、たとえば、19世紀末の帝国主義の理念のもと、国外へと視野を広げていった同時代のアメリカ国民の意識を女性読者が共有することや、第一次世界大戦中の内地における戦闘員としての意識を鼓舞したという、外に向かう力を意味するばかりではない。単調な日常生活をスケッチする小説作品も、コミュニティへ向けられる視線の重要性を説き、共同体への帰属意識を読者に認識させる。他者と共有する日常生活の営みを想起させることで読者たちに連帯感を認識させる。本研究では、そうした「日常」の政治力にも焦点をあて、多面的に、*LHJ* の言説における女性読者たちに及んだ、国民意識を高揚させるための戦略を分析することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) Edward Bok が編集した1890年1月号から1920年1月号までの *LHJ* に収録された小説作品を中心に、掲載された言説を分析する。
 (2) 一次資料内の言説を適切に評価するために、同時代に出版された著書形態の作品を参照しながら分析をすすめた。さらに、著書形態で出版されたつぎの2種の言説を二次資料として分析する。まず、*LHJ* の掲載女性作家による著書形態で出版された作品。第二に、雑誌発刊と同時代の著書形態で発表されている同種言説の著作(家事アドヴァイスブックなど)を視座に入れることとした。

4. 研究成果

(1) 第一次世界大戦期における日常生活がもつ政治的なメッセージ：

Bok の強い愛国心と戦前に確立されていた *LHJ* の女性読者へ及ぼす潜在的な力は、参戦後の同誌を、一種の政府機関誌のような、戦争色の強い誌面へと変えていくこととなった。*LHJ* は読者との緊密な関係を樹立する仕

組みを設けることで、他の競合誌よりも大きな成功を遂げていた。そうして培ってきた同誌と女性読者の緊密な関係性は、戦時において彼女たちを誌面の呼び掛けに敏感に反応させ、内地における戦闘員として、国家の大義に奮闘させることとなった。1917年1月以降、戦争への協力を求める第28代大統領Woodrow Wilsonとの面談を重ねたBokの作るLHJが発するメッセージは、女性読者の国民意識を高揚させ、愛国心を鼓舞し、当時の政治中枢部の趨勢に加担させる力を発揮することとなった。

本研究では、戦時中に発表されたLHJの掲載小説作品の役割を分析し、プロパガンダ小説として政治的なメッセージを発信しているものと、その主題を扱っていないものに大きく分けて分析した。その際、戦時という「現在」、過去から継続されてきた「日常」、そして戦後という「未来」という時間軸に焦点を当てて分析した。戦争を直接扱わない後者の小説群が、平時の「日常」を扱うことで、戦時中に断片化されることとなった女性の経験や時間を結び、戦後に来る「未来」へとつないでいく役割を果たしていたことを示した。

兵士たちが戦地へ赴き「現在」の戦争に従事している間、LHJの女性読者たちは、すでに未来を視野に入れ、新しいアメリカ国家を切り拓いていく準備を進めていた。戦争という緊急の状況に読者の意識をとどめるのではなく、現在の努力を日常生活が営まれる未来へとつなげることで、戦時中の苦難を乗り切る力も与えていた。

戦時中のLHJが読者に呼びかけた活動の多くは、読者個人の家庭運営における努力によるところが大きい。たとえば、LHJが創刊号から取り上げてきたガーデニングのコラムは、食料を供給するための畑に使用用途を変えることを説き、季節に合わせたさまざまな助言を与える。実用的な家事のヒントを提供してきた編み物や縫い物に関するコラムは、節約や戦地へ送る物資の提供のために掲載された。多くの女性たちによる共同作業で行われてきたキルトの製作も、家事の空き時間を利用して完成させる、個人的な活動のように扱われている。同時期に掲載された広告も、戦時を反映するものとなっていた。政府が提言した毎週の食料節約の実施のためには、詳細な調理法が材料とともに紹介されていた。女性読者たちは、商品の選択や購入、そして消費の仕方に関する個人的な行為において、戦時中の消費者としての責任を負った。彼女たちは、日常生活の中での小さな儉約や節約が、国家を支える大きな成果をもたらすことを確認していた。しかし、そうした個人の努力は、女性間の絆を断ち、また、彼女たちを家庭という領域の中へと関心を集中させていくこととなった。戦時中のLHJは、「愛国心」の名の下、就業の機会は増えたとはいえ、20世紀初頭の「新しい女性」を家庭という領

域に戻し、個人的な活動に邁進させることとなった。

一方、小説作品は、断片化されていく女性の経験を収斂させる媒体となった。それらは、読書体験を共有することとおして、戦争を直接扱う他の言説よりも、多くの読者を団結させていった可能性がある。同誌の小説作品は、継続している日常において、自らの力で生きていく登場人物の姿をとおり、再生を果たした国家を担う、アメリカ国民としての意識を鼓舞し続けていた。戦後のアメリカを生きみ出していく力を女性読者たちに授け、未来のアメリカへ向かう視座を与えていたことを示した。

(2) 「料理」の言説における政治力：

19世紀末に同誌で人気を誇っていたレシピの投稿は、女性たちの書く文化を育成し、女性間の連帯感を強める媒体となっていた。LHJの誌面作りに直接加わることで、無名の女性読者たちは、統一された料理を作り、健康な国民による、健全な国家づくりの大義に参加していくこととなった。レシピを書き残すという日常生活における私的な行為は、投稿掲載をとおして、より良い国家を構築することを目的とする公的な領域に女性たちを関わらせることとなった。

イギリスの植民地時代からすでに、アメリカには本国の多数の家事指南書が渡ってきていた。その中には、食事を提供するための料理のレシピも含まれている。しかし、使用される食材や生活様式が異なるために、アメリカ独自のレシピの登場が望まれていた。18世紀になると、当時無名の主婦だったAmelia Simmonsがアメリカ最古のレシピブックを出版すると、多くの家庭がそれを所有することになった。その後、家事指南書以外の言説で名をなしていたLydia Maria ChildやCatharine Beecherらが出版するレシピが、食生活をとおして、アメリカの女性たちの生み出す「文化」の構築を牽引していくこととなった。

本研究では、LHJに掲載されるレシピに焦点をあてて当時の女性たちの文化を分析し、レシピの言説の研究の可能性を指摘した。上記の著者たちのように、すでに名をなしていた女性たちがレシピを書いていたばかりではなく、無名の女性たちがそれをLHJに投稿していた。日常生活において使用していた自分自身の言語で書かれた調理の手順を公表し、時に自分自身の名前を付すことで、無名な主婦たちが公的な場とつながることが可能となった。

大衆雑誌が無名の女性たちを小説の書き手として輩出する媒体となっていたが、文学作品を執筆しない女性たちが料理のレシピという身近な書き物を投稿する機会をとおし、執筆の習慣や誌面づくりに参与していた。また、レシピの投稿が、見知らぬ他者とつながる機会を与えた。投稿にたいする応答が掲載

されることも多かった。同誌を経由することで、投稿者たちは全米の読者との交流をとおして、社会や他者との関係性を樹立していったと推測される。

家事アドヴァイスブックやレシピブックを出版したヘイル、チャイルド、ピーチャーは、愛国心から家庭という場を改善しようと努めた。彼女たちのレシピブックを参照しながら、同時代の多くの女性たちは統一された料理を作っていく。また、19世紀中ごろから世紀末に、愛国心を高揚させる大義を掲げて出版されていた *LHJ* の誌面作りに加わることで、無名の女性読者たちは、国民を食によって健康にしようとする同誌の大義を遂行していくこととなった。同誌をとおして構築された女性たちの連帯感、国家をまとめる大きな勢力を生じさせた。19世紀の多くのレシピの言説は、より良い国家を構築していこうとする大義の遂行を担う、政治的なものであった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

秋田淳子、「Helen Stuart Campbell の小説作品についての一考察」、『欧米言語文化論集 II』(岩手大学欧米言語文化論編) 査読無、pp. 1-13。(2015)

〔学会発表〕(計2件)

秋田淳子、「アメリカの主婦が書いたこと：レシピについての一考察」、中里まきこ主催「無名な書き手のエクリチュール」シンポジウム、2014年12月20日、岩手大学。

秋田淳子、「第一次世界大戦期における *LHJ* についての一考察」、中里まき子主催「世界大戦期の文学創作と女性たち」シンポジウム、2013年6月6日、岩手大学。

〔図書〕(計2件)

秋田淳子、「19世紀にアメリカ女性が書いたこと 料理のレシピをめぐる考察を中心に」、『無名な書き手のエクリチュール』(中里まき子編、朝日出版社) 査読無、pp. 107-14。(2015)

秋田淳子、「第一次世界大戦期における *LHJ* についての一考察：掲載小説作品の役割」、『トラウマと喪を語る文学』(中里まき子編、朝日出版社) 査読無、pp. 237-46。(2014)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

秋田淳子 (AKITA, Junko)

岩手大学・人文社会科学部・講師

研究者番号：10251688

(2) 研究分担者

無

(3) 連携研究者

無